第五福竜丸の乗組員、見崎進さんのお話を聞く会　　２０１３年９月１日　島田「百小屋」

「百小屋」は島田の相賀にある白川郷から移築した、合掌造りの素敵な食事処。見崎進さんの息子さんが島田の駅近くで料理屋をやりたい、どうせやるならかわった店に、ということで、建物を富士を探したりしたが、最終的に白川郷にいい物件があると聞いて見に行ってこの合掌造りに決めたという。白川郷から専門の大工さんにも来てもらって移築。いまは息子さんが料理を担当し、娘さんがそれを手伝って繁盛している。見崎さんは「わたしは食うだけ」と。

見崎進さんのお話　（要約）

戦争中は、１７歳の時に商船に乗った。その船は沈められたが、私は運よく乗っていなかった。その後、徴用船に２年駆り出された。漁船に大砲と機関銃を積んだだけのいわゆる「監視艇」の乗組員として、硫黄島までいった。忘れもしない、ある日の１０時に監視のためにマストに登れと言われて登ったところすぐ、１０時１５分に飛行機に機銃掃射された。わたしはマストに登っていたので、弾が足をかすっただけだったが、甲板にいた５人のうち４人が亡くなった。その時は不思議なもので、死体が横にあっても、怖いとも思わなかった。次にまた襲われるのは怖かった。船が揺れて、死体がごろごろ転がったが、何とも思わずに釜石に上陸した。終戦を迎えたのは函館だった。

第五福竜丸２３人の乗組員のうち、今年、吉田勝雄さんが亡くなったから、残りは７人。漁労長の見崎吉男さんは小川に、船長の筒井久吉さんは名古屋に、冷凍士の大石又七さんは東京、操機手の池田正穂（まさお）さんは三ケ名、豊田小学校の体育館の裏に住んでいる。甲板員の小塚博さんは、御前崎にいるとは聞いているがよくわからない。甲板員の細根久雄さんも小川にいる。

１９５４年アリューシャンで漁をしていたが、網がかかってしまって仕方がないので、南に行こうと、マーシャル諸島沖に向かった。３月１日、夜明け前、薄明かりの中で西の空がひかり、「西から太陽があがった」「そんなバカなことがあるか」「ピカドンだ」などと騒いだ。広島や長崎の原爆のことは映画やニュースなどで知っていたので「ピカドン」だと思った。

そのうちに白いものが降ってきて、「雪か？」「南洋に雪が降るわけがない」などと言いあった。水爆で吹き飛んだサンゴ礁の砕片だった。じゃりじゃりするので、振り払ったり水で洗ったりした。そのうちに、皮膚がひどい日焼けのようになり、やけどのように火ぶくれができ、皮がむけてきた。海での漁は日に焼けるし潮風にあたるので、冬のような長袖を着ることが多い。私も、ごわごわしてしまう木綿ではなく長じゅばんのような長袖を着ていたのでよかったが、半袖の者は、手の全体が火ぶくれのようになってしまった。そのうちに髪が抜けたり、私は下痢になった。

立ち入り禁止区域が決められていたりとか、アメリカ軍が秘密でやっていた水爆実験だということは当時は知らなかった。しかし、アメリカ軍に見つからないか、軍艦や飛行機が現れないか警戒した。見つからないように無線も切って急いで帰港することにした。急いで、とはいっても、遅い船だから２週間かかった。（アメリカが秘密でやっていたことだから、それを目撃した船がいたということがばれたら沈められる、とは認識していたらしい。）

焼津に着くと、医者や報道陣が待ち構えていて、大井外科に行った。真っ黒になった顔にチンク油を塗った姿は、「土人が白粉つけた」ようだった。ガイガーカウンターではかると、針が振り切れた。風呂に入ったが、風呂の水をガイガーカウンターではかると、やはり、針がふれきれた。でも、その風呂に家族も入った。「広島長崎では放射線を浴びると子どもが先に亡くなっている」と通りかかりの人が話していったので心配になったが、その後も家族は病気になっていない。その人も事実を話してくれただけで恨むわけではないが、合ってみたい気がする。

すぐに東大病院に行くことになり、静浜基地から軍用機で羽田に行き、新宿若松町の東大病院に入院した。東大病院では、骨髄検査など産婦人科以外のことはあらゆる検査をした。たくさん検査はしたが、治療らしきものはしなかった。当時はテレビが出たばかりの頃で、買ってもらったテレビで自分たちのことを知った。久保山愛吉さんは同室で隣のベッド。黄疸がひどくなり真っ黄色、それが脳に回ったと言っていたが、亡くなる直前には、妻のすずさんが来てもわかなくなり、手で振り払うような動作をしていた。歳の順で行くと次は自分だ、ベッドの順番でも次は自分の番だ、と心配した。精子がなくなり子どもができない、とも言われ、若い人はかわいそうだな、などと言いあった。結局１年２か月入院していたが、ひとりだったら耐えられなかったろう。２３人の仲間が一緒だから、バカ言いあったりしてなんとか過ごすことができた。

途中で、アメリカで治療するというような話もあったが、アメリカに連れて行かれたら殺されてしまう、

「逃げよう」などと相談し合ったりして、拒否した。

水爆実験はアメリカが秘密にしてやっていたことだが、第五福竜丸のことでそれが世界にばれてしまい、検査費や治療費や補償金をアメリカが全額出すことになった。焼津市からも見舞金のようなものをもらっていたが、アメリカが全額補償することになり、アメリカから受け取った補償金の中から焼津市に返した。。

その時には、「うちの人もあの船に乗っていれば金もらえたのに」「よかったなあ」などとうらやましげに言われて気分が悪かった。

事件以後は、体が心配で、迷惑かけるといけないと思って船に乗る仕事はやめた。なぜか本人の知らないうちに「見崎氏豆腐屋を始める」と新聞記事に書かれていたが、その豆腐屋を始めることにした。豆腐屋をしながら、「よかったなあ」などと嫌みのようにいる人もあったが、けんかするつもりもなく、逆に「原爆豆腐だ」などと言って相手にしないことにした。

他の船も放射能を浴びていたが、口を閉ざした。私たちが入院している間には、「近所の人が口をきかなくなった」とか「うつる」と言われて避けられていたらしい。そのせいで口を閉ざしたのだろう。

われわれが退院して焼津に戻った時には、宮田輝が取材に来た。まわりの人からも「良かったなあ」と祝福された。その頃には、「うつる」などのうわさは収まっていたし、魚も普通に売れていたし、食べるようになっていた。

ただ、船に乗ると迷惑かけると思って漁師になる気はなかった。半年間は迷って、映画ばかり見に行っていた。新聞記事にのっていたように、親戚を頼って豆腐屋を始めたが、初めは売れなかった。押し売りのように一軒一軒訪ねて売ったが、そのうちにラッパがふけるようになり、訪ねなくても売れるようになった。

いまは、静岡でアパートを経営し、ホテルもやっていたが今はやめて妻と一緒にそこに住んでいる。長男は亡くしたが、この「百小屋」も息子と娘がやってくれているし、孫は医者になっている。ほんとうに運が良かったと思う。

今でも１年に一回は検査をしている。被曝者手帳はもらっていない。あまりしゃべる機会はなかったが、おおぜいの前で話しをしてもよいし、広島で血液検査をしていることに協力してもよいと思っている。